Vol.
07

Shumei International

NEWSLETTER

Shumei

Shumei International is dedicated to improving the human condition by restoring the environment, by fostering a deep appreciation of beauty and the arts, and by cultivating leadership among the next generation.
Shumei International has programs around the world. The organization is based upon the philosophy of Mokichi Okada. He taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will inspire a more humane and sharing vision for the world community.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.07

contents

【表紙】
2009年12月に行われたコペンハーゲンCOP15（国連気候変動枠組み条約第十五回締約国会議）に臨むShumeiのパートナーメンバーとスタッフたち。同じ志を持つ彼らは1つのチームとなった。

Shumei

秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics COP15

2 COP15コペンハーゲン 市民サミット
クリマフォーラム09
[Shumei分科会]
気候変動と食物安全に対する
オーガニックによる解決策

15 フィリピンの
自然農法活動
秀明自然農法の研修生 宇都宮大学 大学院 国際交流専攻
前川 麻美

21 しが子ども文化芸術祭
美と音と光の祭典
～美しい地球へ びわ湖から願いを込めて～

Klima
forum
09

PEOPLES' CLIMATE SUMMIT

COP15コペンハーゲン 市民サミット

クリマフォーラム09

[Shumei分科会]
気候変動と食物安全に対するオーガニックによる解決策

総合司会　パトリック・ホールデン
英国土壌協会ディレクター

挨　拶　モーリス・ストロング
元国連事務次官・特別アドバイザー

パネリスト　パトリック・ホールデン
英国土壌協会

バンダナ・シバ
環境活動家

バーバラ・ハチプカ
ザンビア ムババラ女性農業組合代表

アラン・今井
Shumei開発途上国支援担当理事

COP15

COPとは"Conference Of the Parties"の略で締約国会議を意味します。国連気候変動枠組条約(UNFCC)に基づき、条約の具体的な履行について議論する国際会議として設置され、95年以降、条約の最高機関として毎年開催されています。

持続可能な農業で環境に変化を

Shumei国連担当理事
Alice Cunningham
アリス・カニングハム

Shumeiは2009年12月7日から18日まで、コペンハーゲンで開催されたCOP15（国連気候変動枠組み条約第十五回締約国会議）に、正式オブザーバーとして参加しました。今回のCOP15では、「京都議定書」以降の取り組みについての討議が注目されました。京都議定書は1997年のCOP3で採択されました。京都議定書は温室効果ガス排出量の削減に向けて各国に具体的な取り組みを課した初の国際的な議定書となったことは歴史的な重要事でしたが、アメリカの離脱、中国やインドなどの新興国には削減の義務づけが課されない等、問題点も多々ありました。

その後、気候変動による被害が極めて深刻であるという危機感が世界的に強まり、2007年にインドネシアのバリ島で開かれたCOP13では、京都議定書の期限が切れる2013年以降の新たな枠組み（いわゆる「ポスト京都」）として中期削減目標を決めようと交渉が始まりました。そして今回のCOP15で、アメリカおよび中国やインドといった新興国も含めた主要国が排出削減に参加する新たな枠組み作りと削減目標の決定を目指したのです。

このCOP15には世界192カ国が参加し、そのうち115カ国が首脳レベルを送り込むという、これまでにない重大な会議であったことは間違いありません。また元アメリカ副大統領のアル・ゴア氏やイギリスのチャールズ皇太子など各界の著名人が次々と参加し、気候変動の諸問題について意見を述べ、市民団体やNGOなど世界中から5万人以上がコペンハーゲンに集結し、その関心の高さがうかがえました。

しかし結果的には、重要懸案は先送りされ、全体目標として気温の上昇を2度以内に抑えることが決まりましたが、中期的な削減目標は数値として設定されず、京都議定書の延長についても決まることなく閉幕されました。各国の利害関係が先攻し、政府レベルでの政策的な取り決めの限界を浮き彫りにしたとも言えます。

その一方で、デンマーク政府主催のクリマフォーラムでは、NGOや市民レベルによって画期的な提案が提示され、今この社会、そして地球が必要としているものは何であるかという重要な課題について活発に討論が交わされました。Shumeiは、「気候変動と食物安全に対するオーガニックによる解決策」と題し、幅広い経験と見識を持つ4名の講演者を招き、討論会を行いました。開演前には、元国連事務次長であり、この気候変動問題に対して早くから国際的に活動されてきたモーリス・ストロング氏よりご挨拶を頂きました。

これは環境問題ではなく、人類生存に関する問題なのだ

元国連事務次官・特別アドバイザー
モーリス・ストロング氏
Maurice Strong

はじめにShumeiの活動と小山理事長のリーダーシップに私は心から賛辞を呈したいと思います。

私が自然農法や有機農業が重要だと考えるのは、気候変動に伴う主な危機の一つが、世界の食料供給の危機であると確信しているからです。私たちが犠牲にできないことの一つに、〝人々がどこにいても健全な食べ物を楽しめるという環境〟があります。問題なのは、多くの食料供給事情は芳しくなく、食料供給システムは気候・風土そのものに非常に攻撃的だということです。だからこそ、私たちは今の状況を変えるためにこの締約国会議（COP）に集結したのです。

私は地域の自然な食物の正当性（地産地消）を信じています。より多くの人々が家の近くで自分たちのための健全な食料を生産すれば、私たちは途方もなく無駄な、環境的負荷の高い「輸送」というものを避けることができます。皆さんが食料として購入しているものが店に届くまでの炭素排出などの環境的コストを考えれば、私たちの習慣を変えなければならない多大な必要性を提示してくれます。これを実行するために犠牲にしなければならないものは何もありません。なぜなら自然食は必然的に良いものだからです。それは自然の栄養価の高さだけでありません。もし私たちがShumeiと手を携え、世界中の人々が自宅近くに自然食が供給できるように手助けすることができれば、それは健康にとって非常に重要であり、経済、また気候変動に必要とされる根本的な変化への大きな貢献となるでしょう。

私は気候変動についてすべてを知っているわけではありませんが、非常に興味を持っています。そして今回の会議（COP15）は、ただの国連会議ではないと認識しています。この会議は、ただ〝どうしたら環境を改善できるか〟ということではありません。これは人類の生存に関することであり、それを確かなものにする持続可能な生き方のために必要なことを実行するという、人類の能力についての会議なのです。

願わくは、このクリマフォーラムで起こることが、別会場で行われている公式会議に影響を与えてほしいと思います。私たちは、これをただの政治的な話し合いではなく、義務としなければなりません。ここですべてを完結できるわけではないでしょうし、成し遂げたことがすべてを決めるわけでもありません。皆さんは変化を起こすことができ、このイベントが変化を起こせると確信しています。今回のこの機会を頂けたことに感謝するとともに、このイニシアティブ（発案）において、Shumeiとそれを支援してくださった方々にお祝いを申し上げます。

（要約）

気候変動に対して今、農業システムの変化が急がれる

英国土壌協会ディレクター
Patrick Holden
パトリック・ホールデン氏

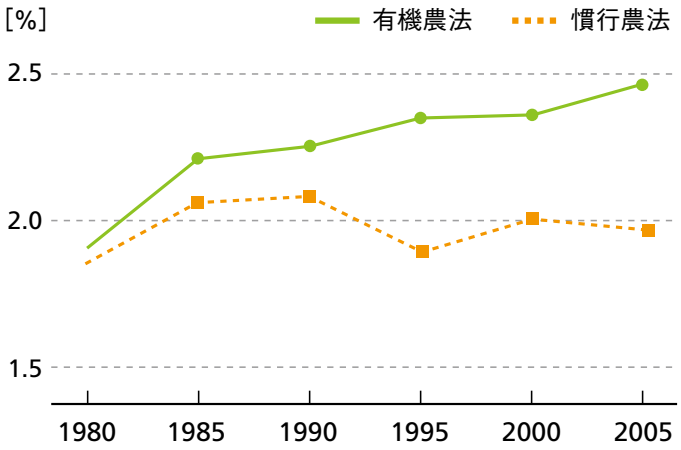
科学者ジョン・ペニングトン氏は最近「ここ10年以内に突発的に世界的な食料危機が起きるだろう。それは既に進行中であり、その最大要因は気候変動である」と発表しました。土壌協会はこの問題に対し限られた時間の中で対処するとすれば、食料と農業システムはその最前線であり、問題の中核になると考えています。我々は過去30年間、変革を目指し多くの持続可能な農業モデルを展開してきました。この農業モデルには多くのバリエーションがあり「自然農法」はその中の一つです。これらの農業は、農業への統合的アプローチに基づき、再生可能でない投入物を最小限にし、土作りを目指し、生物多様性を大切にし、社会的かつ文化的に取り組んでいます。そして、一般市民が農業を支援することを可能にしました。

このような農業にもっと注目すべきであると、土壌協会は最近、「土壌、炭素、有機農業」というタイトルの研究報告書を発表しました。これについてお話し致します。

大気中の二酸化炭素は1850年以来、増加し続けています。それには三つの要因があります。第一に化石燃料、これに起因する増加量が全体の70%。次に森林・バイオマス破壊で20%。残り10%が自然界最大の土壌バンクからの炭素放出です。それに対し、私たちができることは化石燃料の掘削を削減し、熱帯雨林を復元することで、実際それに取り組んでいる方々は既にたくさんおられます。しかし、それにより炭素を取り込めるペースは至極緩慢である一方、気候変動のティッピングポイント(急激で大きな変化を起こす臨界点)を防ぐために残された時間はあとわずかしかありません。では私たちの農業システムを根本的に変化させることで、大気中の二酸化炭素を元に戻していくことは可能なのでしょうか?

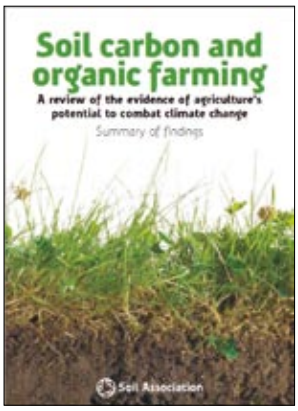
慣行農業は窒素肥料などを外部から投入するのに対し、有機農業では外部からの投入を最小限にし土壌の肥沃さを維持しています。我々の研究の結果では、世界中のすべての耕地をこの持続可能な農業に切り替えれば、安定した炭素として

■ 土中における土壌炭素含有量



Results of a long-term US comparative trial by the Rodale Institute
（ロデール研究所の調査結果より）

土壌協会からの研究報告書



初年度からすぐに土壌炭素を堆積し始めることができ、それは排出量削減に大きく貢献するというものです。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）は、土壌バンクが土壌炭素を閉じ込めるという事実は非常に重要であると強調しています。しかし、炭素削減において農業を対象とする政府は現在ほとんどありません。

また農業における家畜が排出するメタンガスの影響が世界的な問題となっています。我々の研究によれば、北欧の伝統的で持続可能な農業システムでその農場に適した数の反芻（はんすう）動物を飼育し、メタン排出を制御したならば、マイナス要因なしの利益を得ることができるというものです。牧草を飼料として畜産し、肉、乳製品などの食料を生み出すことを考えれば、これは非常に重要なポイントです。世界の食料の半分は、役畜を使用しながら生産されているからです。歴史を通じて動物たちは、食料生産の中心的役割を果たしてきました。土壌協会はこの畜産の問題が気候変動への解決策の重要部分になると考え、貢献できることを望んでいます。

英国には、「土地の脂肪の上で暮らす（贅沢（ぜいたく）に暮らす）」という言葉があります。これは食肉や乳製品などの畜産を意味しています。20世紀後半から英国、また西側諸国の多くは「土地の脂肪」を世界の他の地域へとシフトしてきました。我々は今、熱帯雨林の「脂肪」に頼って生活しています。アマゾンの熱帯雨林を伐採した土地で大豆を生産しており、菜食をしている人も、長距離輸送という足跡（フットプリント）を負っています。これは私たちみんなに責任のあることなのです。私たちはフードシステムを根本的に転換しなければならない、また気候変動に取り組まなければいけない。そしてそれは復元力があり、地域化され、長期的に持続可能なシステムでなければなりません。

（要約）

（報告書の内容は土壌協会のウェブサイト www.soilassociation.org 参照）

農業における生物多様性と精神のモノカルチャー

環境活動家
Vandana Shiva
バンダナ・シバ博士

Vandana Shiva［バンダナ・シバ］
思想家。世界的環境運動家。インドのニュー・デリーを拠点に、科学・技術とエコロジー研究財団、ナヴダーニャなどを主宰。適切で持続可能な農法、生物の多様性、生態系および性の平等を支持するキャンペーンを指導してきた。現在はグローバル・ジャスティス・ムーブメントのリーダー。

現在、有機農業や自然農法というのは、気候変動論議の孤児のようになっています。その誤解を解くのは草の根運動に取り組むだけだと私は信じています。

当時、私はモンサント社からインドに有機農業という概念を導入したという理由で責められていました。まるで遺伝子組み換えが国産だとでも言うかのようでした。アルバート・ハワード卿（※）は私に大きな影響を与えました。ハワード卿は、農業研究者としてインドに送られてきました。当時インドでは農業原則が整っていなかったからです。ハワード卿は、畑には害虫などいないということを発見しました。それに倣い、私もインドの小規模農家と害虫を私の先生にしようと決心したのでした。ハワード卿が『農業聖典』という本を書いた後、有機農業は正式に「有機農業」と呼ばれるようになりました。英国の土壌協会、そして米国のロデール研究所もこれに鼓舞されました。私たちはインドでガンジー生誕の日に有機農業を「農業に対する非暴力」と呼び、祝うことを決めました。

私は「Soil Not Oil」という本を書きました。これは、私が土壌協会主催の会議でさせていただいたスピーチから来ていますが、これがプロセスの始まりであり、この論議を始めるきっかけだったと思います。化石燃料を中心とする考えや農業から、土壌を基盤とした考え方と農業、生きた土が正しい基準となる農業への移行について著しています。過去25年間、有機農業を実践して分かったことは、農家にできることは、土と無数の有機体（微生物）に尽くすことであり、生産量を推計する必要はなく、後は大地が引き受けてくれるということです。そして環境保全型農業（有機農法・自然農法）に従事してきた者は皆、この農業が気候変動の解決策であると気が付いています。気候の不安定化の要因は、飢餓の要因でもあります。しかし、気候の不安定化を促し飢餓を促進するようなシステムを解決策として提案する動きもあります。

飢餓と気候変動の要因とその関連性は、いくつかの誤った常識から生まれました。一つ目は「化学物質を使用した農業はより多くの食料を生産できる」というものです。これは真実ではありません。化学物質を使用した農業は、より多くの「商品」を生産するのです。「商品」は「食料」とは違います。商品は貿易（輸出入）され、家畜の飼料やバイオ燃料などに使用されます。現在、ドイツでは、遺伝子組み換えのジャガイモの認可に対する議論が起こっています。政府の主張は「このジャガイモは工業用の糊（のり）に使用される予定だ」と。政府は遺伝子組み換え作物で食べるものも車の燃料などの工業的な用途も、すべて賄ってしまいたいのです。もちろん、大衆の意見は後回し。なぜなら、産業界はあまりに強大な力を持っているからです。

二つ目は「化石燃料が経済成長の核であり、経済成長は貧困と飢餓を無くす」というものです。これはインドの実態が示しています。過去数年間、インドのGNP（国民総生産）は

※アルバート・ハワード（1873～1947）英国の植物学者。インドで25年間農業研究者として勤める。世界の有機農業運動の創始者であり、「現代の有機農業の父」と呼ばれる。

毎年９％のペースで成長してきました。ところが飢餓と貧困は今までで最高レベルで増幅していて、インドは今や、世界の飢餓の首都となっています。ＧＮＰ（国民総生産）やＧＤＰ（国内総生産）測定では、急成長していた過去15年の間に、一人当たりの消費は１７０キログラムから１５０キログラムへと減少しました。これにより経済成長や化石燃料の使用は飢餓や貧困の削減に全く貢献しないことを証明しています。実際は逆で、化石燃料の使用が貧困を生み出す原因となっています。農業がその顕著な例です。飢餓が生み出される第一段階は、生態系重視の農業から化学肥料などを投入する農業への転換で、化学肥料の使用は温室効果ガスの原因である窒素酸化物を排出します。

さらに化石燃料を原料とする化学物質を投入する農業は、単一栽培を要求します。ちょうどファシズムが単一文化を要求するのに似ています。私は工業化農業を大地のファシズムと呼んでいます。心の単一栽培（モノカルチャー）が畑の単一栽培を生み出しているのです。世界で工業化農業が行われている地域を旅するとき、数キロにわたるトウモロコシ畑、数キロにわたるナタネ畑や豆畑をみることになるでしょう。

これに対し、自然順応に生きるとき、自然は多様性を与えてくれます。自然のサイクルは多様性によって繁栄するものなのです。インドで「緑の革命」で破壊されなかった数少ない地域の畑を訪れたとき、すべての畑で目にするのは、２００種類もの生物種が美しい調和の中で互いに生長している姿です。木々があり、家畜もいる。それぞれの生物種が再生と循環を完成する働きをしています。

単一栽培のおかげでインドは飢餓から脱却できたとされていますが、これは真実ではありません。なぜなら、米と小麦の増産は、他の犠牲の上に成り立っているからです。キビ、粟、トウモロコシ、豆、ナタネなどのさまざまな作物を栽培していた地域はすべて、米と小麦の大規模単一栽培となりました。私たちが行った試算では、もしそれだけ広い土地で有機農業を行っていたら、単一栽培と同等量の米と小麦の生産量を得ていただろうという結果でした。化学肥料を使用した農業など最初から必要なかったのです。

私たちの計算によれば、地球温暖化ガス全排出量の40％は、工業的農業、グローバル化した食料生産、何千マイルも離れたところへの輸送という、常軌を逸したシステムによるものです。その結果として、より少ない食料、より多くのゴミ、そしてより粗悪な食料を得ています。

私たちは今「食料」というものが消えてしまうかもしれないという瀬戸際に立たされているのだと思います。なぜなら食料というのは、本来の要素を兼ね備えた土壌と、生産者の愛のこもった世話があって初めて生産されるものだからです。

インドも岐路に立たされています。ご存じのようにインドはダール（マメのカレー）の国です。この豆類が「緑の革命」によって推進された単一栽培に追いやられてしまいました。今、インドは大きな豆不足に陥っています。価格は高騰し貧困層には手が届きません。インドの食事はロティ（インドのパン）とダール（乾燥豆全般）で、これがバランスの取れた食事にもかかわらず、ダールがない。そして、ア

（Dirt! The Movieより引用）

イ・ダールと呼ばれる代替品を貧困層に売っています。このアイ・ダールというのは、実は加工品で小麦と大豆を混ぜて形をダール（豆）に見せかけているのです。

皆さんは、口にできるものが、このような押し付けられた偽物の食品しかない世界を想像できますか？ 私たちが環境農業を保護しなければならない理由は、資源保全や気候変動の解決策だからではなく、これが食物を得ることができる唯一の方法だからです。スーパーの食品棚をだますことはできても、人の身体をだますことはできません。身体は食物と同じ、土からできています。偽物の食品で身体を痛めつけるほど、ますます多くの病気が何十年にもわたって蔓延していくのです。

国連食糧農業機関（FAO）によると、現在飢餓に瀕（ひん）している人は10億人。これについて心から痛ましく思うのは、この飢餓人口の半数は食料生産者だということです。それは彼らの食料生産のあり方が借金に基づいているからです。世界の豊かな国を含め、農家は皆、借金をしています。小規模農家が消えていく理由は、借金を返済できなくなったときに農地を差し押さえられ、土地を追われるからです。このためインドでは過去10年間に20万人の農家が自殺をしました！ 今までのインドではあり得なかったことです。

なぜでしょう。それは外部からの投入物に頼るというシステムが農家に借金を強いるからです。借金をすると、育てた生産物は借金返済のために売らなければなりません。だから自分の田んぼに米があっても、トウモロコシが畑になっていても、農家は食べることはできません。ですから、飢餓の本当の解決策は、生産コストを削減できるような内部の投入システムであり、これでこそ農家は、育てたものを自分たちで食べ、余剰分を販売に回すことができるのです。世界中にある余剰農産物を、私は偽の余剰と呼んでいます。それらは土地に対して払われていない借金から抽出された偽物の余剰なのです。農家たちから搾り取られた偽の余剰であり、そのせいで世界中の農村地域で女性や子どもたち

が飢えています。それは第三世界からの搾取なのです。

「緑の革命」はインドに何をもたらしたのでしょう。まず水を駄目にしました。「緑の革命」が実施された地域では地下水がほとんど枯渇し、生物多様性が破壊されたことが多くの研究で証明さました。特に殺虫剤汚染はひどく、「緑の革命」が導入されたプンジャビから、がんの専門病院のあるベキャニという町に行く電車は、利用者の半分が治療を受けに行くがん患者のため、今では「がん電車」と呼ばれています。「緑の革命」がプンジャビにがんをもたらしたのです。私たちは、このプンジャビ地域に生物多様な生態系を築くことで、食料生産性は最高5倍に向上しました。さらに、農家はより高品質で多様性に富んだ作物を生産できるようになったため、この地域のフードシステムは10倍に増進し、彼らは経済貧困から脱することができました。そして、干ばつ下では、化学肥料を使用する農業は完全に失敗しました。生物多様な有機系が干ばつで生き残ったのです。

私が困っていることを一言で言うなら「科学の愚」です。多くの人々が、バイオ炭を作ることによって炭素を固定でき、気候変動に貢献できるとしています。しかし、自然の営みは炭素循環です。自然は炭素を保持することはもともと知っており、実際、太古の昔から炭素を保持してきました。人類がどうやって炭素循環を修正するかを知っている、自然が間違っている、なんていう新しい傲慢（ごうまん）な思い上がりは、人類が直面している新たな脅威の一部だと私は思っています。

私たちは今、二つのことに取り組むことができます。一つは農業です。環境保全型農業は誰でも始められ、明日からでも生産者として、あるいは消費者として活動することができます。60億の人々がこの変革のリーダーとなれるのです。私たちは五つの国（常任理事国）が世界の他の諸国と協定を結ぶまで待つ必要はありません。「土壌を守り、より多くのより良い食料を提供し、同時に気候問題を解決する農業をすることは良いことである」これはすべての人々が賛同できることであり、環境保全型農業こそがその答えなのです。

二つ目は、意識改革が必要だということです。人類はどこかおかしくなってしまってお金、お金と、お金をもうけなければならないという考えで頭がいっぱいで、お金が現実で生命は虚構であるとでも思っているようです。私たちは生命を基本にしなければなりません。お金は交換の媒介物（手段）であり、それ以上のものではありません。世界の富を計る基準ではなく、単に交換の媒介物（手段）なのです。

気候問題で明らかになったのは、私たちは低炭素経済の必要性、つまり、低炭素、低石油経済を創造しなければならない、ということです。私たちは土壌を豊かにしてくれる豊富な炭素と、身体を育む食べ物を称賛し、育成し、増加しなければなりません。そして、私たち一人ひとりがこれに従事することができます。一方には恐ろしい、不愉快な議論があることも事実ですが、それでも前進し続けることができます。公式会合の場で合意が達せられるまでには、まだ時間がかかりそうですが、私たちはきっと有機農業や自然農法を今の数千倍に拡大することができるでしょう。

（要約）

持続可能な社会を地域から世界へ、そして次世代へ

ザンビア ムババラ女性農業組合代表
Barbara Hachipuka
バーバラ・ハチプカ氏

ムババラ女性農民共同組合は、女性の地位と収入の向上を目指し、地方の女性たちが力をつけることが国の労働力の発展に貢献できると、２００３年に創立されました。当初、組合の目標は、メンバーにハイブリッド種や肥料などの農業資材を低価格で提供することでした。なぜなら、それにより生産量を増加できると思っていたからです。しかし２００３年から２００４年は干ばつのため、作物は不作で貧困から脱出することはできませんでした。

私は２００４年に、日本で行われていたPan-Asian Youth Leadership Summit（広島青年平和会議）でShumeiと出会い、自然と共存し土を尊重することが作物の生産力を生み出すという、日本の自然主義者、岡田茂吉師の理念に基づく秀明自然農法を知りました。この農法は在来種を使用することや、乾季の間、土中に水分を保つため枯れ草や落ち葉を入れることなどに重きを置いています。そして一番の魅力は、自然農法で栽培された在来種の作物はハイブリッドのものより強靭（きょうじん）で栄養価も高いということです。組合の農家は、在来種のメイズ（トウモロコシ）を含む現地作物の種を使って自然農法を始めました。

ザンビア農民が直面している問題は土壌の枯渇です。Shumeiのアドバイスを受け、農民たちは近くの枯れ草を作物で覆うことに着目しました。この取り組みは土本来が持っている生産力を自然と回復させ、長い目で見れば有害となる肥料の素晴らしい代替方法になります。

慣行農法では10ヘクタールの土地にメイズ2.5トンの収穫が、自然農法では10ヘクタールの土地に5～7.5トンも収穫できたのです。次第に組合に参加する農家が増え、現在では２５００世帯、５０００人以上の農家が自然農法を実施しています。

自然農法は組合のメンバーをより持続可能な生活に導いてくれます。なぜなら自然農

法はより生産性が高く、コスト効率もよく、慣行農法より抵抗力のある代替方法であり、干ばつや洪水などの気候状況の変化にも耐えることができるのです。

彼らはもう種や肥料を買う必要はありません。生産量も以前より高くなっています。季節ごとに種子供給量も増加しています。今や2000世帯の農家から5000人以上の人々が加入しているこの組合は、もはや生産量を増加させるだけではありません。この農法の原理を、家族を養い、子どもたちのための衣服や教育のために作物を売り生計を立てている他の農家の人々に教えています。そして将来のために種を保存することを伝えているのです。

秀明自然農法の原理が農民たちを化学肥料や農薬を使用する前の、自然環境だけで作物を育てていた頃のやり方に戻せたのです。農民たちに自信を取り戻させ、家族にも持続可能で健康的な生活を提供することができました。

基盤整備や調整、情報共有、国境を越えたパートナーシップを通して、私たち（環境問題への提案など）主張者は止めようのない力となるでしょう。一人の活動家や一つのNGO団体だけですべての問題を解決することはできません。このCOP15は始まりであり、原動力であり、変化への道なのです。私たちはお互いに、隣の人々に、若者に、政府に、その他多くの人々に呼び掛けなければなりません。また民間企業からの協力も求める必要もあります。企業の社会的責任であり、企業も社会の一部である以上、それに貢献すべきだからです。彼らも気候変動による荒廃に苦しむ国民の一人なのです。貨幣は企業も私たちも守ってはくれません。私たち自身がお互いを守ることができるのです。さあ、無駄な時間を費やすことは止め、協力し、調和し、影響を与えましょう。そして最後には私たち共同体が一つになることを目指して。

（要約）

自然農法活動は、人に、地球に素晴らしい影響を与えてくれる

Shumei開発途上国支援担当理事
Alan Imai
アラン・今井

2004年農業支援のためにザンビアを訪ねた私に一人の農民が近寄ってきてこう尋ねました。「私たちはとても貧しいのです。あなたが日本から来たということは、私たちに種を買うお金をくれるのですよね?」と。私は「種を保存しないのか?」と尋ねると、彼の答えは「No…」。プロジェクトはここから始まりました。

当時、ザンビアでは干ばつが続き、作物は枯れ、農民たちは国際社会の援助を待っていました。しかし、私たちは、一時しのぎの支援ではなくザンビアの農家が永続的に自立ができるあり方で支援したいと考えていました。そんな状況の中、在来種のメイズ(トウモロコシ)だけは枯れていないことを知り、在来種のメイズを集め、来期の作付け用として組合の農家に支給しました。そして1000軒の農家が在来種で秀明自然農法を取り組むことになったのです。幸運にもその年は雨にも恵まれ、素晴らしい収穫を祝うことができました。私たちは、ザンビアの農民たちを化学肥料やハイブリッド種による高額で持続困難な農業生活から自由にしてやりたかったのです。現在では2500世帯5000人以上の農家が自然農法を実施し、在来種で自家採種し、健全な作物を育てています。そして今では彼ら自身が自然農法の知識を近隣の農家たちに共有できるまでになったのです。

自然農法の創始者、岡田茂吉師が「自然がすべて教えてくれる」と言っているように自然農法の原理は自然尊重です。しかもこの農法はただの食料生産の方法にとどまらず、生産者と消費者が自然の中で調和して暮らせる生き方そのものなのです。ザンビアでは人口の70%以上が地方に住む小規模農家です。それに対し、日本では人口の96%以上が消費者なのです。ということは、日本においては消費者の意識を高めることが重要になってきます。現在、自然農法生産者のほとんどはCSA(※)活動をしています。生産者は支えられているのではなく、消費者と相互扶助の関係を築いているのです。

世界中どこへ行っても、スーパーマーケットに行けば欲しいものはいつでも手に入ります。しかし、自然はそのようには動いてはいません。自然農法生産者を支援するCSA会員になるには、自然の摂理を理解する必要があります。レシピに従って野菜を選んでいたのが、今ある野菜によってレシピを考えるようになり、喜んで圃場を訪れ農作業を手伝い、圃場から消費者家庭への流通をも手伝う。CSA活動が促進されることで、自然への尊敬の念も深まるのです。

あるとき、「有機農業や自然農法は全世界70億人の食を賄うことができるのか」という質問を受けました。私は、「数十億人の小規模農家を力づけ、開発途上国における自然農法活動で、自給自足を促すことによって世界に食料供給することができると思う」と答えました。そして数十億人の消費者に、生き方として自然農法を奨励することで、現在の状況からこの母なる地球に希望が見えてくると思います。自然農法の中心にあるメッセージが、今日の世界で起こっている食料確保や気候変動に対する大きな解決策となり、さらに人間の内面にも変化を与え、地球や私たちの生活にも素晴らしい影響を与えてくれることでしょう。

(要約)

※CSA(Community Supported Agriculture)、消費者や販売者などが、生産者と連携し"自分たちの食料生産に自分たちも積極的にかかわる"という形の農業。

Klima forum 09
PEOPLES' CLIMATE SUMMIT

意識改革、心の環境を変えること

Alice Cunningham

Shumeiが主催したこの分科会では、まさに今我々が何をしなければならないか、気候変動の根本的な原因および、具体的な解決策が提示されました。400人で埋め尽くされた会場の大半は若い世代で、まさに今社会が抱えている種々の問題を引き継いでいく世代です。その彼らから私たちのパネルは高く評価され、何人もの若者が「ほとんどの分科会が問題提起ばかりだ。でもこのパネルは私たちが実際にできる解決策を提示してくれた。非常に勇気を頂いた」という、うれしい言葉を頂きました。パネリストの発表にもあるように、気候変動について討議する上において、農業を抜きにして語ることはできません。現代の食料生産が気候変動に与える破壊的影響は計り知れません。化石燃料を中心とする農業から環境に優しい農業への切り替えは必至です。食料生産に起因する温室効果ガスの排出量は少なくありません。食物の加工による炭素フットプリント（足跡）や長距離輸送によるフードマイルなど、私たち一人ひとりが食と食を取り巻く環境に対する意識を高め、自然の法則に則した本物の食物を求めていくことがいかに大事か。ただ単に農業を利益優先のシステムと見なせば、偽物の食品が出回り、単一栽培にさらに拍車が掛かり、食料価格は商業的にコントロールされ、農家の生活は疲弊し、引いては食料危機へとつながります。私たちは気候変動を起こすのではなく、このシステムを変えるのです。私たちは秀明自然農法の理念に基づく生き方を推進することで、今の社会全体の環境、システムを変えていけると信じます。自然尊重、自然順応を基盤とした生き方は、地球の生命のサイクルを重んじます。すなわち、自然に対して破壊的な農業や流通システムではなく、自然と調和した社会を構築するのです。農家も、消費者も流通関係者も、それぞれが環境に優しい活動をすることによって、バランスの取れた社会となり、地産地消やコミュニティーガーデンなどによって地域の活性化にもなります。私たちが個人レベルで、地域レベルで自然と調和した生活を営むことで、街も人も健康になり、そのポジティブな影響が地域から国へ、そして世界全体へ広がります。それは一人ひとりの意識改革、心の環境を変えることから始まるのです。

フィリピンの自然農法活動

Shumei開発途上国支援活動調査報告

2009年9月23日～10月8日現地調査

秀明自然農法の研修生 宇都宮大学 大学院 国際交流専攻 **前川 麻美**

フィリピンは、バナナやマンゴー、サトウキビやココナツなどを輸出する豊かな農業国のイメージがあるが、実際は農作物の輸入額は輸出額を上回り、特に主食のコメ不足は深刻で、現在フィリピンは世界一のコメ輸入国である。

原因は昨今の自然災害による農業被害、急激な人口増加、そして国土の大半が火山灰に覆われたやせ地であるという点があげられる。

今回、秀明自然農法の研修生として、現地に滞在した青年よりレポートを掲載する。

Republic of the Philippines

【フィリピン共和国】

東南アジアの7100あまりからなる島国。日本の8割ほどの面積に約9200万人が暮らす。16世紀にスペイン領、西南戦争後アメリカ領、1946年フィリピン共和国として独立。マレー系の民族が95%、ローマ・カトリックが80%を占める。公用語は英語とフィリピノ語。プランテーション農業が続いており農村地帯に住む半数は最貧困。美しい自然を資源とした観光業も盛んである。

フィリピンの現状

現在フィリピンは、国の政策として国際競争力のある農林水産業を目指し、農業の近代化を推し進め、大量生産による経済成長を目的にバイオテクノロジーで改良が進んだ高収量品種が作付されています。それにより農民たちは毎年の種子（遺伝子組み換えされた高収量品種）、農薬、化学肥料を購入しなければなりません。零細農家は、自分たちの食料を売ってまで現金を得なければそれらを購入することは難しく借金が膨らみ、農業をすればするほど生活は苦しくなっているのが現状です。結局農業で食べていくことができなくなった農民は都市へと移住し、スラム街での生活を余儀なくされています。つまり、農村地域から発生した貧困は、都市へと移り拡大していっているのです。これがフィリピンにおける「貧困」と「飢餓」の実態です。もちろん今までの近代的農法は、経済成長に大きく貢献してきたことは確かですが、農業近代化によってもたらされた負の産物である「貧困」や「飢餓」は、確実に存在していることを無視することはできません。秀明自然農法は、農薬・化学肥料を使わず、自家採種により行われる持続可能型の農業です。Shumeiは、この自然農法の推進により、貧しい農民たちに食料の安定的な確保と生活の向上を目指した活動を行っています。

Shumeiの活動

フィリピンにおける自然農法を中心としたShumeiの活動は、2003年から始まり今年で6年目になります。最初は1ヘクタールの土地に、秀明自然農法を実践するモデル農場をつくり、集会などを開催、自然農法の必要性や利点をイラストを用いながら分かりやすく説明して周囲の農家に呼び掛けてきました。その活動は次第に広がり現在では100軒近くの農家が自然農法を実施するまでに成長し、実施を促す人も地元農家の手によって行われるようになりました。Shumeiのモデル農場がある場所は、フィリピンの首都マニラから車で5時間北へ行ったところにあるサンバレス州の州都イバ。そして、イバの北方に隣接しているパラウィッグという街と、南方に隣接しているボトーランという街の二つです。今回は、ボトーラン地域に点在する51人の農家に焦点を絞りインタビュー調査を実施しその調査結果から、実施農家の現状や、自然農法活動の成果、今後の課題について紹介していきたいと思います。

1 自然農法実施農家の生活レベルの実態

現在、フィリピンでは、アキノ政権下で策定された農地改革が行われています。フィリピンには、最も貧しいとされる「土地なし農民（土地を持たない農民）」と言われる農家が存在していましたが、この農地改革計画により、ボトーラン地域の実施農家も、国から1ヘクタールの土地を配分され、それにより8割の人が0.5～1ヘクタールの土地を所有しています。このように、実施農家の84%は、農地を他人から借りずにその与えられた1ヘクタールの土地で農業を営んでいますが、残り16%の農家は、専業農家で、さらに土地を借り広い農地で農業を営んでいるというのが現状です。

フィリピン社会は、貧富の差が非常に深刻な問題とされています。フィリピンにおける全国平均世帯月収は14,000ペソ、全世帯のうち下位40%が月6,000ペソ前後からそれ以下の生活を送っています。その上の40%

※1ペソ=1.93円（2009年11月13日現在）ロイタージャパン提供

■農法比較表

	自然農法	慣行農法
利　点	●収穫時期が長い ●収穫後（調理後）の賞味期限が長い ●低コストでできる (種子・農薬・化学肥料、人件費が不要) ●マーケットでよく売れる ●害虫が減る ●カラバオ（水牛）の寿命が延びた ●収穫物の味が甘い ●魚やカエルが戻ってきた	●高収量を得ることができる ●見た目がきれい
弱　点	●収穫量（単収）が減少 ●収穫物の形が不ぞろい （見た目が悪い）	●出費がかさむ （種子・農薬・化学肥料、人件費） ●土壌がやせる ●味が苦い ●調理後1時間で異臭を放つ ●水牛の寿命が短くなった ●農薬・化学肥料の影響で病気になる ●魚やカエルが水田から消える

の世帯月収は月10,000ペソ～15,000ペソ。残りのトップ10%が、世帯月収52,000ペソ以上の高所得者層から富裕層になっているのが現状です。

調査対象農家の平均月収はと、1,000～3,000ペソ。一般的に下位に位置付けられている月収と比べても2分の1しかない状況から見て、フィリピン社会全体から見て実施農家は、とりわけ貧しい層に位置付けられます。

2 自然農法は生活レベルを向上させたか

さて、このような生活状況下にある農民たちが、種子・農薬・化学肥料購入の必要がない秀明自然農法に切り替えることで、生活レベルは改善されたのでしょうか。

まず、実施農家に、自然農法に切り替えたきっかけを聞いてみると、34人中100%が回答したものは、やはり種子・農薬・化学肥料購入の必要がなくなったため低コストで農業ができるという点でした。

そして、自然栽培作物は収穫した後も調理後も、長時間味が落ちず質が良くて美味しいことから、自然農法で収穫された作物を購入したいという消費者は多いそうです。インタビューに応じてくれた農民たちの中で、慣行農法のものと同じ値段で自然農法作物をマーケットで販売している農家もいますが、自然栽培のものはすぐ完売してしまい、リピーターもいるほど人気があると話していました。ちなみに、農薬・化学肥料をまかなくなった水田にはカエルや魚が戻ってきて、それが見えない収穫になっているそうです。

では慣行農法の利点は何か

マーケットで秀明自然農法作物を販売。

地元農家に自然農法を呼び掛けるShumeiスタッフのRamon Deveraさん。

というとただ一つ、やはり「高収量を得ることができ作物の見た目がきれいで形もそろっている」という点でした。

反対に慣行農法の弱点はというと、こちらもやはり、農薬・化学肥料・高収量品種の種子の購入が負担になるということ。農薬・化学肥料の使用は、散布時に人を雇うため人経費が余計にかかる。さらに、農薬・化学肥料の長期的な使用により土壌の団粒化作用を失わせてしまうため、徐々に生産性が落ち持続的に同じ土地を初期の収穫量を維持しながら使用することは難しい（土壌が弱る）。そして、慣行農法作物は自然栽培のものと比べ味覚は苦く、調理後1時間たつと味が落ち異臭がするということでした。さらに、農薬・化学肥料は農家の人体に病気などといった害を及ぼします。その具体的なものとして、農薬散布中に頭がくらくらし吐き気を催した、頭痛がした、ぜんそくになった、がんになった、農薬・化学肥料を使用している水田に入っただけで肌がかゆくなる、足の爪がなくなった等でした。一方、自然農法の弱点はと言うと、収穫量が慣行農法と比べて少なくなり、形が不ぞろいで見た目があまりきれいではないという点だけでした。

以上、自然農法と慣行農法それぞれのメリット・デメリットを見てきましたが、慣行農法は自然農法に比べ、有益性が高くないのにかかわらず、自然農法に100%切り替えることができない農家はインタビューに答えた農民中32%に及び、いまだに自然農法を全く実施していない農民もいます。では、なぜこんなにも利点がある自然農法に、切り替えられないのかという疑問が生まれます。

まず、農業が成功したか否かを評価する場合、その考え方の根本は慣行農業と自然農法の場合とで異なること

フィリピンの農業ではカラバオ（水牛）の役割は大きい。

を理解していなければなりません。慣行農法を実施している農家の場合、ある一定の農地から商品価値の多く生産して市場に出し、1円でも高い価格で販売して利益を得ること、生産第一主義・経営重点主義の商業としての農業です。そのため、出費がかさむ、味が落ちる、人体に影響をもたらす、持続可能的に農地が使えなくなるなどといった多くのリスクを背負ったとしても、農家は高収量の収穫を得ることのできる慣行農法をやめることができないのです。これに対して、自然農法の場合は、不要な経費がかかることもなく、自然順応・自然尊重に根差した自然環境の保全、人間の健康に対する貢献を重要視しています。この二つの視点を理解すると、100%自然農法に切り替えられない理由は、「収穫量が落ち収入が減ってしまう」から。つまり、農家自体が生産第一主義・経営重点主義であるからであると言えます。実際慣行農法と自然農法の両方を実施している農家に「なぜ100%自然農法を実施しないのか」と質問したところ、全員「土地の支払いや子どもの養育費等といった支払いがあるため、収穫量が落ちる自然農法に切り替えることで急に収入が減ると生活が困る」との答えでした。

しかし、ここでもう一つの疑問が生まれます。「自然農法に切り替えることで、本当に生活は困窮するのであろうか」という疑問です。一体どちらの農法の方が手元に残る収入が多いのでしょうか。収入の実態をインタビューし、比較調査を実施しました。情報を聞き出すことができた他の農家15人全員が、自然農法に切り替えた方が差し引きの収入が高いことが分かりました。さらに自然農法は経済面だけでなく、環境面にも大きな利益をもたらします。それは、今まで使用していた農薬・化学肥料をやめることで、劣化の一路をたどっていた土が徐々によみがえり、土の三相分布のバランスが良くなります。その結果、作物自体が病害に強い体質となって、味覚や栄養も良い作物

が育つようになります。さらに、土の理化学性が改善されるにつれて、作物の生産性も上がってくる。つまり、土本来の状態に戻すことにより、土本来が持っていた力を発揮し、生産性も上がり味の良い作物が育つようになっていくのです。

Shumeiが推進する自然農法のような経済的・環境的に持続可能な農業は、小規模農家の生活レベル向上に貢献する上で、重要な役割を果

たしているのです。

しかし、いまだに近代農業の方が大きな利益を生み生活が豊かになるという既成概念から離れられず、農業をすればするほど生活が困窮してしまっている農家がたくさんいます。その既成概念は、政府の「農業の近代化による経済発展」という方針によってプッシュし支えられているため、農家は農薬・化学肥料使用の慣行農法に苦しみつつも、その農法から離れることはできず、農薬・化学肥料なしで作物はできないという既成概念に侵されているのです。

Shumeiの活動はサンバレス州全体から見ても、まだまだ小範囲です。この既成概念を覆し、より豊かな生活を実現させるために、求められる活動の一つが農薬・化学肥料の恐ろしさを農民に提示し、自然農法の利点を伝えることです。収量が減っても差し引きの収入は増えることを、具体的数値を示し農民に伝え、経済的に持続可能でありメリットがあること、化学肥料や農薬の不使用のため安心、安全な作物を得ることができ体にも害がないことを、実際に体験した現地住民であるフィリピン人農家が周りに伝えていく活動が、貧困や飢餓のない持続可能な社会実現のためさらに必要になってきています。

今後もShumeiが行う自然農法の推進と活動の発展に期待していきたい。

しが子ども文化芸術祭

美と音と光の祭典

～美しい地球へ びわ湖から願いを込めて～

２００９年10月17日、滋賀県大津市にある滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールにおいて、「しが子ども文化芸術祭～美と音と光の祭典～美しい地球へ びわ湖から願いを込めて～」が行われました。

これは、しが文化芸術学習支援センターが中心になり、「すべての子どもたちに美しいもの、本物に触れる機会を」と滋賀県内の文化施設、ＮＰＯ、企業、行政が協働し開催されたものです。

秀明インターナショナルは、このイベントに、世界的サックス奏者ポール・ウインター氏を招聘し、嘉田由紀子滋賀県知事と、芸術と環境についての対談、その後にポール氏のサックスソロコンサートを開きました。

会場は６００人以上の親子連れで賑わい、嘉田知事、ポール氏からのお話とコンサートを楽しみました。

Children Art Festival in Shiga,
Festival of Beauty, Light and Sound

To the beautiful earth, Make a wish from Lake Biwa

ポール・ウインター氏のお話

２００４年、私はコンサートのために初めてここ琵琶湖を訪れました。そのとき、この美しい湖が琵琶という楽器にちなんで付けられたと聞き非常にうれしく思いました。私は小さいころから音楽に興味を持ち、その後ジャズに関心を持ちました。そして28歳のとき衝撃的な体験をし、現在は命（魂）を表現している音楽に興味を持っています。

あるとき友人に誘われクジラの歌についての講義を聴きに行きました。私はそこでこれまでに聞いたことのない魅力的な音に心を奪われました。それは、ジャズ歌手でも、ブルース歌手でもなく、海の中に住んでいる巨大な生き物の声でした。その歌の美しさに大きな魅力を感じたのです。

そのとき、人間が考えている音楽よりも、地球に存在する交響曲の方がはるかに素晴らしいということに気が付いたのです。クジラの歌はベートーベンの交響曲にも引けを取らない構成を持っていることも知りました。そして同じ海域にいるクジラたちは同じ歌を同じように歌い、翌年その海域に行くと全員がまた別の新しい歌を歌っています。まるでクジラたちが自分たちのヒットチャートを持っているようです。その講義を聴いたことで私の人生は大きく変わりました。この素晴らしい音楽を作り出す彼らの知性にとても驚かされました。しかし陸上から得られるもので取って代わることのできる製品を作るためにクジラが大幅に数を減らしているということも知り、クジラを殺すことをやめなくてはと強く思いました。

翌年また新しい体験をしました。初めてオオカミに会うことができたのです。オオカミを連れて全国を回り、学校で子どもたちにオオカミに関する授業をする人が、私の住んでいるコネチカットの街にやってきました。この授業では最初に人間とオオカミの歴史というものに触れ、人間がオオカミに対して抱いている恐怖心には根拠がなく、健康なオオカミが北米で人間を襲った例は一つもないことを知りました。そしてこの２つの動物についてもっと知りたいと思うようになりました。そして彼らの声を自分の音楽に取り入れ、彼らの魂をみんなに知ってもらい、意識を高めたいと思いました。

あるときグリンピース（※）のゴムボートに乗って、コククジラがえさを食べている海域に行きました。そこではクジラが呼吸のため水面に上がって、６メートルぐらいの高さまで水しぶきをあげていました。クジラたちには人間に危害を加える理由がありません。クジラたちは音波を出して、自分の周りの存在を常に把握しているのです。こうした体験からこの動物たちがいかに優雅で優しいかということを学びました。

クジラの中で一番大きいといわれているシロナガスクジラは、だいたい体長35メートルに達するといわれています。陸上で一番大きい象ですら、せいぜい4メートルぐらい。シロナガスクジラの舌だけでも象よりも重たいのです。クジラたちは、３０００万年にわたって歌を歌い続けてきたといわれています。

Paul Winter　［ポール・ウインター］

アメリカ・ペンシルバニア州出身。ノースウェスタン大学在学中に結成したジャズ・セクステットがジョン・ハモンに認められコロンビア・レコードと契約、ケネディ大統領に招かれてホワイトハウスで演奏した最初のジャズグループとなる。1968年に初めてザトウクジラの歌を聞いて大きな衝撃を受け、自分の音楽に自然界の音を積極的に取り入れるようになる。音楽業界最高の栄誉とされるグラミー賞を5度受賞しているほか、国際的な賞を数多く受賞している。

※グリンピース　国際的な環境保護団体（NGO）

友人と一緒にミネソタの森に行ったとき、オオカミの遠ぼえにまねて自分たちも一緒にほえてみました。運がいいと、まず一頭がそれに応えて遠ぼえをし、次第に仲間たちが加わってコーラスへと発展していきます。

１５００万から２０００万ぐらいの動物種がこの地球上に存在していると言われていますが、人間はこの地球上に暮らしている動物の中で一番の新参者です。オオカミやクジラたちが３０００万年前から地球上にいるとしたら、それは人間の歴史の１００倍に相当します。また数十億年という地球の歴史からすれば、他の動物の歴史も一瞬です。こうした動物がここまで生き長らえてきたというのは、自分たちが暮らす環境と調和をとる術（すべ）を学んだからです。そのことをわれわれ人間はこうした先輩たちから学ばなければなりません。なぜなら、人間はまだそのことを学んでいないのだから。世界の多くの場所で人間は自然を破壊する行動を繰り返しています。

そして今、私たちにとって一番大きなテーマは、私がクジラやオオカミから学んだように「先入観からくる恐怖心」を乗り越えることです。船から落ちるとクジラに飲み込まれると怖がっていた時代がありました。それは聖書にあるヨナとクジラの話に基づいています。今ではそれが事実でないことが分かっています。ヨーロッパ人は森に入るとオオカミに襲われるという恐怖心をアメリカに持ってきました。そのことも事実でないことも今では分かっています。そしてアメリカ人は長い間、ロシア人のことを怖がっていました。その必要がないことが今では分かっています。私はロシアに17回も行っていますし、ロシアのグループとは何度も一緒に演奏しています。

生きているすべての動物たちと一緒になって、人間はこの破壊の螺旋（らせん）から抜け出して、それを止める方法を考えないといけません。これは私にとって、大きな冒険です。皆さんと一緒にこの冒険ができることはとても光栄なことです。

嘉田知事のお話

地球で最も新しい住民である人類の文明、そして自然とともに暮らすとはどういうことなのか、アフリカと少し昔の琵琶湖畔の事例を挙げて、お話ししたいと思います。

私は1950年埼玉県で生まれました。関東平野の山もほとんど見えない、湖もない、田畑ばかりのところで育ちました。そして中学校の修学旅行のとき、比叡山と琵琶湖を見て本当に驚いたのです。比叡山の山並みから見る琵琶湖の美しさ、樹齢千年、二千年の杉木立の中にある延暦寺には、千年も燃え続けているという仏さまのろうそくの灯りがありました。自然もすごいけれど、この仏さまの伝統もすごい、こんなところに住んでみたいと思いました。そして歴史が好きな私がいつも気にしていたのは、人間はどこからやってきたかということでした。高校2年生のときに読んだ今西錦司さんの「人類の誕生」という本に、500万年前、700万年前、最初にアフリカに人類が誕生し進化したと書かれていました。私はアフリカに行って人間の本質を勉強したいと思いました。それが1969年です。今は1ドル90円ですが、その時代1ドルは360円でした。

当時学生が、まして女性がアフリカに行くなんてあり得ない。でもどうしても行きたいと探検部に入り、大学3年のときにタンザニアに行きました。そこは電気もガスも水道もない、屋根を草で葺いて、木と土を塗った家で、水は川でくむ。食べるものは野生の動物を狩ったり、山で木の実を拾ったり、農業は少し始めていたところでした。そこでは本当に人間が強いのです。私たちは、蛇口をひねって水を手に入れますが、そこでは川の水を朝早くくみ取りに行きます。10リットルぐらいを壺（つぼ）に入れ頭の上に載せて運ぶ、遠いと片道4キロ、往復2時間もかかります。主食のトウモロコシも粉にする。石でつぶして、それに5時間かかる。すると両方で7時間。それが1日の大事な仕事です。そのときに私が学んだのは「人間の力」です。本当に子どもたちも女性も元気です。私は文明というのは人の力をなえさせるのではないか、「未開」というけれど人間は「全開」なんだと思いました。ただアフリカは、生まれた赤ん坊の多くがすぐに病気になって亡くなってしまいます。例えば1000人生まれたら、5歳までに200人ほど亡くなる。勉強したいと思っても学校に行けない。そして女性はお医者さんになりたい、看護士さんになりたいと思っても、チャンスがない。丸1日何にも食べられないという様子を目の当たりにしました。自然の中で人は強いけれど、やはりある程度の開発、経済発展は必要と思い、アメリカに留学しました。

どうしたらアフリカの人が豊かになれるのだろうと大学で開発社会学を学びました。そこで、水や大地や森、自然を大事にして、経済発展をするモデルは、アメリカにもアフリカにもない、実は日本にあると教えてくれました。山を切り開いて田畑を作り、魚を捕って、当時の日本はまだまだ自然を大事にしていました。

アメリカではポールさんのよ

嘉田由紀子　［かだゆきこ］

1982年滋賀県庁に入庁、琵琶湖研究員、琵琶湖博物館総括学芸員を経て、2000年京都精華大学人文学部教授および琵琶湖博物館研究顧問となる。過去30年以上にわたり県内各地を歩き、人々の暮らしと琵琶湖のつながりを学ぶ。2006年7月滋賀県知事就任。次の世代の幸せや豊かさを実現するため「未来を拓く共生社会へ」を基本理念として、滋賀の持つ「人の力」「自然の力」「地と知の力」を活かした取り組みを進めている。

うな方は例外で、自然を征服して人間が強くなるということを信じる人も多くいます。日本人は蛍に恋を語らせたり、蝉が鳴くと、ああ夏がきたなぁと季節を感じ、「一寸の虫にも五分の魂」という精神を持っています。アメリカでは蝉はノイズ、蝉が出てくるとみんな農薬で殺そうとする。やっぱりアメリカの文明は自然とあまり仲良くないなぁと思いました。私はウィスコンシンというところに留学していました。札幌ぐらいの緯度です。そこではセントラルヒーティングで真冬なのに大学の中はみんな半袖、こんなにエネルギーを使っていたら、本当にもったいないと思いました。やはりこういう文明は、世界のモデルにならないと思い、日本に帰ることにしました。

　そのとき美しい琵琶湖を思い出し、その研究を始めたのが1974年でした。当時琵琶湖周辺は、湖の水を飲み水に使い、魚が溢れるほどいて、子どもたちは朝から晩まで湖に出て、捕った魚を食べるというような暮らしが生きていました。それはアフリカに似ていると思いました。

図1　1997年のアフリカ　マラウィ

琵琶湖の45倍の広さがあるマラウィ湖。
人々が生活水として湖を利用している様子。

図2　昭和30年代の琵琶湖

当時の人々が湖の水を利用している様子。

　アフリカにマラウィという国があります。日本の本州ぐらいの広さですが、このうちの6分の1ぐらいがマラウィ湖という湖です。広さは琵琶湖の45倍もあります。このマラウィ湖畔の写真（図1）を1枚見てください。1997年のタンザニアで半年暮らし、その後子育てのため、しばらくアフリカに戻れませんでした。そして1995年に湖のあるこのマラウィを選びました。以来、ほぼ毎年マラウィ湖に行っていますが、いまだに電気もガスも水道もありません。朝起きたらこの湖畔に出て顔を洗って、木の幹で歯を磨いて、この湖の水を使って洗いものもするという、本当に自然の中で生きている地域です。

　どうしてアフリカが貧困なのか。1960年代以降アフリカの国々は独立したが、やはりアフリカ諸国は列強の影響下で、資本も技術も入ってこない、教育もされない、そして富を吸い上げられていました。そして今アフリカは戦争に加え、エイズ、感染病もありますす。何とかアフリカを助けたい。そういう活動もしていきたいと思っています。

　次の写真（図2）は湖岸で水をくんでいるところです。これは遠い昔の世界ではありません。昭和30年代の琵琶湖畔です。私が調査を始めたころ、まだこういう姿が残っていました。琵琶湖博物館の一階は水族展示、二階には古い農家、昭和30年代の暮らしぶりが再現されています。皆さんに自然に対して配慮した優しい暮らしが昭和30年代琵琶湖辺にあったということを知ってほしくて、私が計画しました。

　知事として、今日ポール・ウインターさんもおっしゃったように、琵琶湖と川と山と仲良く暮らせる、そういう暮らしぶりを取り戻したいと思います。どんなに文明が進歩しても、鮎一匹、バラの花一つ工場で造れません。自然の恵みがあるからこそ、私たちは生きていける。琵琶湖がある滋賀県ならではの新しいライフスタイルが、生み出されるのではないかと思っています。

子どもたちへのメッセージ

知事のお話に対し、ポール・ウインター氏は「知事のおっしゃるように日本が世界のモデルになり得ると思う。日本には長い伝統があり、神道や仏教など、自然に敬意を払う宗教がある。アメリカにはそういった伝統は先住民を除いてはない。ヨーロッパからアメリカへ移住した白人たちは、昔から住んでいる人たちを征服しようとやってきた。しかし、今、目覚めてアメリカ人も先住民の伝統を再発見するような活動が起こり始めてきている。嘉田知事の琵琶湖の話は素晴らしい。滋賀にこんな素晴らしい女性の知事さんがいらっしゃるということを、アメリカに帰ったら宣伝したい」と。和気藹々（あいあい）とした対談の最後に、お二人から、子どもたちへメッセージが送られました。

嘉田知事は、「人間というものは、自然に比べて小さな存在である。小さい人間がいるから自然を守れると思う。固体は頂くけれど種は絶滅させないよう自然と仲良く暮らしていける。滋賀県には、里山があり、また間伐をして森を守っていこうと思います。大自然の恵みを頂きながら、従来の日本のライフスタイルを目指していきましょう」と。そしてポール・ウインター氏は、「お母さんを愛しなさい。お母さんはあなた方のお母さんでもあるし、また地球もあなたのお母さんですよ。琵琶湖もお母さんです。お母さんを愛しなさい。つまり、琵琶湖にごみを捨てない、琵琶湖を汚さないように。そういうお母さんを愛することはお父さんも喜んでくれることです」と。

本当に心温まる素晴らしい対談に参加された方は感動しました。

その後、ポール・ウインター氏のソロコンサートが行われました。

ザトウクジラの作曲したメロディーをもとにポールさんがハーモニーをつけた「お母さんクジラがアザラシの赤ちゃんにささげる子守唄」や、グランドキャニオンに生息する小鳥ミソサザイの声を取り入れ、悠々と流れるコロラド川の流れを表現した曲、そしてアメリカ本土で唯一生き残った野生のオオカミの遠ぼえからインスピレーションを受けて作った曲などが演奏されました。

コンサートの後半に、琵琶湖にお越しいただいたポールさんに感謝の気持ちを込めて地元ヨシ笛アンサンブル「青い鳥」により「琵琶湖周航の歌」が演奏されました。ヨシ笛は琵琶湖に生息している葦で作られており、葦（よし）は水をきれいにする働きがあり、また琵琶湖に住む魚や鳥の棲家（すみか）として生態系保全に一役買っており、環境と芸術をテーマにしたコンサートにふさわしい演出となりました。最後にポールさんがアフリカの民謡をアレンジした曲「MINUIT（ミニュイ）」を、地元の子どもたちと知事も舞台に上がって全員で手をつないで歌い、楽しい芸術祭となりました。

Shumei
NPO法人 秀明インターナショナル
〒529-1814　滋賀県甲賀市信楽町田代353-1
TEL:0748-82-3140　FAX:0748-82-3170
E-mail：info@nposhumei.or.jp
http：//www.nposhumei.or.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK
2010年3月1日発行